

912.9

力

善人法科
小原浩明
蟻
人
院



春日龍神



月は^木越く^木あまの^木ね^木と^木月の^木あはれ^木
あまの^木と^木月^木に^木あ^木は^木あ^木ん^木 乞^木の^木梅^木尾^木

志^木の^木通^木法^木師^木あ^木ま^木の^木我^木の^木産^木後^木た^木れ^木心^木の^木

は^木よ^木る^木と^木志^木の^木目^木に^木の^木神^木の^木心^木を^木け^木る^木あ^木ま^木の^木志^木

の^木上^木の^木志^木の^木目^木に^木の^木神^木の^木心^木を^木け^木る^木あ^木ま^木の^木志^木

の^木上^木の^木志^木の^木目^木に^木の^木神^木の^木心^木を^木け^木る^木あ^木ま^木の^木志^木

此...
自...
越...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...

とあるは、この書に記して、神皇正統記の事なりといふ

又言わよ、この書に記して、神皇正統記の事なりといふ
上
奈良坂の比と合せ、礼殊と云ふる
を中に入すなりといふ
空の表れ、事ある
く、風も妙なり、枝とされ、春日山、神皇正統記
物、の麻、まゝも、落、ひとく、出、ひ、勝、と
折角と云ふ、ひ、上、と、礼、殊、と、云、ひ、の、事、也

を言ふは、この書に記して、神皇正統記の事なりといふ
ハ、武、荒、野、の、事、也、此、が、原、由、也、と、云、ひ、
む、神、乃、は、い、く、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、
一、も、也、神、皇、と、云、ひ、て、神、皇、と、云、ひ、

春日

新オウゴンすやトク春日トク七トクのトクにトク影トクさトクくトク接トクひトクとトクは
方トクにトク春トク日トク山トク交トク流トクもトク未トクわトクるトク危トクらトクるトクをトクらトクたトクか
乃トクちトク寺トク月トクとトクみトクくトク光トクをトク海トクらトクるトク七トクたトクらトクにトク法トク
茶トク花トクもトク八トク重トク橋トクのトク影トクをトク七トク日トク所トクのトク春トクらトクえ
のトクまトクげトクかトクりトクまトクれトク 毎トクにトク此トクとトクあトクはトク程トクにトク入トク無トク後
夫トクれトク事トクのトクひトクらトクあトクりトクひトクくトクさトクえトクくトクはトク身トクをトク
いトクらトクるトクをトクえトク 性トクもトク不トク審トクにトクあトクりトクあトクるトク今

露トクひトクとトク軟トクしトクとトク結トク結トクへトク三トク重トクのトク山トクにトクあトクるトク大トクをトクとトクう
けトク一トク摩トク耶トクのトク生トク 伽トク耶トクのトク成トク道トク 禪トク拳
のトク説トク法トク 雙トク林トクのトク入トク無トク海トクとトクあトクるトクくトクをトクえ
をトクあトクへトクくトク將トク家トクにトク結トク結トクへトクくトク本トク佛トクにトクあトクるトク此トク林トクの
元トク我トクのトク時トク凡トク秀トク行トクをトクとトクえトクかトクるトクをトクはトク橋トクよトクうトクせ
にトクあトクりトクくトク上トク 時トク夫トク地トク震トク動トクとトクあトクらトクハトクいトクつトク後トクにトク象
のトク影トク林トクにトクあトクるトクとトクくトク人トク氏トク因トクにトク雷トク動トクせトクりトク 時トク次トク
早トク雷トク

一、^ノ法と施受と^ノ心、其外妙法紫那

一、^ノ王又持法紫那^{下、曲}王、樂就團樂

平施王

一、^ノ王、樂就團樂王、^ノ樂雅阿修羅王

一、^ノ羅曠阿修羅王乃恒沙^ノ比春^ノ屬引連^ノく

一、^ノ是も^ノおれ^ノく^ノ度^ノ列^ノたり、^上就^ノ女^ノたら^ノる^ノ夜

一、^ノ洞^ノの^ノ神^ノく^ノ白^ノあ^ノち^ノれ^ノや^ノ和^ノ因^ノ比^ノ東^ノの^ノ波^ノ派^ノを

一、^ノ白^ノあ^ノち^ノれ^ノを^ノ深^ノの^ノか^ノえ^ノも^ノら^ノる^ノ海^ノ多^ノ屋^ノ澳

一、^ノゆ^ノら^ノる^ノ大^ノ月^ノ比^ノ由^ノ衣^ノ佐^ノ保^ノ比^ノ所^ノ行^ノら^ノう

一、^ノみ^ノ出^ノる^ノ六^ノ、^ノ八^ノ大^ノ龍^ノ王、^ノ八^ノ大^ノ龍^ノ王^ノ月^ノ八^ノの^ノ冠

舞動

と云ふは 日下 所々春日社の丹のこまの
 中人のあり城まゝつゝつて死せぬ事評して
 びて是より摩耶の誕生轉輪奉化佛法
 西林乃入城まゝつりて毛海をありや
 西海と人さへ入居を 日下 海を 日下 海を
 といふ 日下 海を 日下 海を 日下 海を 日下 海を
 ぬ海 日下 海を 日下 海を 日下 海を 日下 海を

のりして新女を南方に飛去ゆひつ
 神々様海の法を善哉言えきと
 其さげふ守の大地をかひく天にひ
 ら城水端 つた 海を つた 海を つた 海を つた 海を
 たり

大原河事

大原河

是らな白河乃院おはしを新修す也
扱も世夜先帝二位殿とくしあなを
平家の二門長門をくもは浦ありと
悉果おひくひの院を所ありとすけ
さそおひととりのあげをりし用世な
き河命とひるのあらしの河守能

昔らるる白河乃院子江に在りて

休も世に及先帝二位殿と云ふは

平家の二門長門公と云ふは

忠果公孫ひくは乃院公と云ふ

我九節を以り判發義經兄才徳存く
尸之持の神室ありゆへに都に御
治ひの古程に女院ハ初より所也給
ぬるりしと先帝安徳を皇女所著
授并に二位殿の所跡と所帛乃為よ
大原北條光院は後世といひ所座
とありぬゆと法皇所著とありぬ帛

此ありてその就室ありて作同の學子也
諸とも付くやとゆへに此張りの大
和へ所著ありきとありぬ所著也道と
作を傳りて結の女院山室と物乃さひ
未上
寺事とありぬ世の此よりゆへに
佐よりの新築也此彫都の有りき
佐とありぬゆへに此ありぬ

かきひき行極き飛ひ付て物思へせ
人目をたらし安うのりき女院折入下にむま
れとやまもれ上に賤り元本の奇の音く
楳の気張の色女にれ音あえ四ハ舞れ音
まはらふれ人拂元下成らそ元上茶新元上側
飛まひ志ひ元思ひのり博とそ西原
意うとやととそ元れ元ふ神の然うま元く

いんち納その角う海のうよあうり
橋成つ局とひ局かう局な河保局元
木藤と折係信のよゆ局下うん局たを
ふらひん局な局に事局あれ局も局意局送局た局を
と局保局飯局王局の局お局と局と局檀局特局心局乃局う局う局
き局送局飯局志局の局と局茶局摘局ら局飯局薪局と
ふ局く局さ局海局く局に局種局り局一局仙局人局よ局は局へ局せ

好ひく終み成道る所もや我も此
 の為なれし津花形見らるく於山
 津入中入王九其の重乃花名
 強とみえや喜歌ととよ山落ふ
 整整るひの露もあらと茶よくた原乃
 業いそらん 行業ととよあある
 大原への津あまの かつて大原へ

河津成く深光院のみさるぬとん原
 せし露ひひ庭の夜茶とよのあひ
 て青柳あそとるうの池の深茶は
 小ゆれく錦とゆらふとさうらる茶
 名山ぬき咲乱八重を雲れるぬり
 山阿鳥乃色も君れ河津と待ふ
 あり王上法皇池の行とあいらんま

他よりけの橋敷ききて波の花を
整えりきれ 同ち上 花のけり花をひまら
落来るく ち 水の音さへりありさ
緑薔乃垣羽平代雲乃山にわかた
あも乃ひさう ト 一室に清堂ありて
まゝら霧ふり乃香風たはほを
落るハ月もまゝ ト 帯は乃灯とかくと

かゝる所ら物まら居く ト くれえ

女院の御菴室よてわり乃公軒あら
はる権もひさ ト 霧薔乃深くさむら
あつ物まら ト のまら ト な ト いた ト び ト ぬ ト 葉
乃作 ト 張 ト ち ト 流 ト り ト ぬ ト ち ト 是 ト ち ト 方
果の由緒乃甲納を ト ち ト ぬ ト ト くれ ト ち ト ね
人目稀成山中 ト ち ト 何 ト ち ト 御 ト 馬 ト の ト ぬ ト ち

27
かんの女院の御位を御座り高き

とれまへ御座りての 内侍 女院はよの山を

御座りて御座りて今もは御座りて

御座りての御座りての御座りての御座りて

御座りての御座りて今もは御座りて

御座りての御座りてとありては御座りて

御座りての御座りて 王 御座りての御座り

尼院は御座りての御座りて 内侍 御座りての御座り

御座りての御座りては御座りての御座りて

御座りての御座りては御座りての御座りて

御座りての御座りては御座りての御座りて

御座りての御座りては御座りての御座りて

御座りての御座りては御座りての御座りて

御座りての御座りては御座りての御座りて

大御之此房今ぬおるをせありゆき
 御座る之御海ぬきゆき
 といひたももかきくきもらんといひあすとも
 志らぬ此身あつらひ先帝北御西御
 忌御深らよもゆきし極重悪人を
 他方便に称彌施得生極樂まま
 とらぬお存上二夜殿一門のへん成等心

覺南無河彌施佛 而 や菴室のわたり

一人者のまのあつらく是の御やひ

ゆき 内侍 唯今おれさけつらひと女院のい

ぬき 王 かくて何まら女院大御

言の房の御まら 内侍 花形身ひちたひ

させ給ふら女院ぬき海せ給ふ所まら

見ひ折るゝあつらひ大納言の房ありい

たふの法會に御幸せしむるに

申^下に於て御執の志んぬの世とてまを

願^下くは此名とまふごのせとをば願^下は

雨袖のききまは流ゆや^下とるなりま

法^下り人あはれ道^下か^下と^下輕^下びあ^下せ^下念^下の

念^下り^下茶^下く^下に^下提^下取^下の^下光^下の^下と^下期^下く^下

十念の法^下に^下願^下せ^下る^下聖^下の^下奉^下迎^下と^下待^下

は^下あ^下お^下の^下う^下の^下り^下け^下の^下意^下を^下と^下り^下

か^下と^下も^下と^下思^下ひ^下出^下の^下誠^下の^下亦^下實^下に^下君^下家^下に^下

敷^下意^下乃^下盡^下末^下に^下く^下わ^下れ^下も^下と^下り^下た^下也^下

芥^下子^下乃^下星^下を^下細^下た^下と^下り^下法^下に^下法^下の^下月^下な^下

ら^下て^下見^下ひ^下や^下今^下も^下強^下と^下ん^下 扱^下や^下御^下の^下

折^下ち^下り^下や^下い^下り^下の^下御^下の^下御^下の^下春^下色^下

甚^下も^下と^下や^下水^下糸^下の^下折^下ち^下れ^下と^下法^下の^下法^下の^下

あつたまもきききの名跡そかゆゆ
遠くよるは白雲ら ちのけ花の飛ん
る 葎草の志げとらうらたあまらく
か入給ふ道の末 家とややく実寐
光の静成光の信とあめひり
乃陰もあきふけいぶ松枝小咲とあ
池の藤波あひらく これも御書と

侍はらん 青葉の道は庭梅初花
よのも珠らん仲とや替はる花と秋
と叡慮あひゆくもあつたけりやけ
兼葉の飛乃志らんうらもあつたけ
居成ありやく 思とあつたけ山の奥
の信和と雲井の月と余前あつたけ
はるらんあひらく山里まらけ御書

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

此乃... 之... 也

薩下ろくや薩下んとせり折たの
かり塩ふくくらまき今たがよのく見たり
処に徳登守教経ら。安徳を前見すを
たねの脇まゝあり家朝の供せよとて
海守に死入 ト新中納を志盛ら
沖あり船のいらとひあひ甲とやらん
ふくく記がれとひれ家妻らうらうらと

ろりろくや海あそひよき家 ト七三六
二位殿ふぬ色のうみちよ祈りくら海
ろりろくやとらんて我あら女んあり
とんも教のひあいらう教海、主上の心
供やらん。安徳天皇の所ひとらり船
ろりろのそひらひくく河をと物さわり
とん海國をすけとらんわかくかく

清ら後所あり。極樂世界と云ふ日
此夜此波の下にさう城をたす所
有るをまんとは清く養へ給へ極楽
地ありとびりんにびりりせぬまひ天竺
皇太子清願と云ふ也。又十念乃
山為に西よびりりせあり海。今を
山常流河の流もふ八波に底も都
日

有とて是と密約の御前少とて
乃をえん入候ふらりも清くえん
いと清く成の成をりあひと用服をた
命ありと二夜龍形おこなりあるの
洞の神と志あり持えりきさびる
清く残るゝとて清くぬきとて
とて清くはくお清くとてありと

三
於此免の月影とて思ひの
も言ふ井のたよるるに
ゆるみちちるをあら
儼と日くは酒のきり
しとて好むやちの
てを好む塵子の海
と雅好るとも塵を
とて思ひの月影とて思ひの
も言ふ井のたよるるに
ゆるみちちるをあら
儼と日くは酒のきり
しとて好むやちの
てを好む塵子の海
と雅好るとも塵を

あらしやの 深淵の
にありて遠寺に鐘の
ゆるむる寺の夜に
の光をんたるを
社乃と名れし灯も
も言ふ井のたよるるに
ゆるみちちるをあら
儼と日くは酒のきり
しとて好むやちの
てを好む塵子の海
と雅好るとも塵を

くくくくくく和光の社らよまま屋まくくおお
沙汰の文守ま屋まああくくああれれ出出光光

おおははいいややいい事事ののららいいああるるああららああ

者者ののああらら今今ああららいいああららいいああららいい

いいれれ勝勝たたいいああららいいああららいいああららいい

いいれれ約約ううああららいいああららいいああららいい

叔叔下下馬馬ををいいららいいああららいいああららいい

下下るるいいららいいああららいいああららいいああららいい

おおのの力力神神ののいい事事やや蟻蟻通通ののいい社社

てておおののああららいいああららいいああららいいああららいい

るる上上ああららいいああららいいああららいいああららいい

ののいい事事ううれれいいああららいいああららいいああららいい

いいれれああららいいああららいいああららいいああららいい

いいれれああららいいああららいいああららいいああららいい

念ふ此二種は、
あやまゝも社壇の
まはりて、
あつて社殿と
これらうらそ
あての花
是れ記書と
あての花
まはりて、
あつて社殿と
これらうらそ
あての花
是れ記書と

作 押
ひくちん
ゆだそれ
初ノ末
も言の
うらうら
あつて
あつて

あはれいづりしちりしもの思ひくはるる

しく我まかかろぬ年たつぬある

あめびちをきておぼるる物あるんぬ

ふまらぬ科をほりおぼるる物あるんぬ

とよまらぬ物ありぬ物あるんぬ

信ふ物あるんぬありしやまらぬ

とらるるわらぬ物の思ふ

お義わりは是ら道のちまらぬを

ひくはるるものとみらるるあり

乃あるんぬ物代ありしもの今人

備にありぬ物代ありしもの今人

もあはれくは御書所とありしもの今人

てのあはれを撰ひてありしもの今人

表代のまらぬ道とありしもの今人

川てみまはあれんさるわがらももぬ
私をいづ人作はあらんき甚あらん凡依の
長弁徳を徒に混中のもろひをあらね
神ひよよあまれは深流をゆくあひま
の花に仲の常又秋を蟬の吟にまひ
はまら私をた将あらぬざれは今たあど
が物をなされはあまら神も紙文のん

とくは文らんわ
日
国の清らに新ちり月もたの物と川を
みまは神さあなりのおくは物と好く
高南枝よ果とくけ胡馬山凡にひくあり
神よはくく神急作は神急乃はと
あまらるんといふ中へ事たひま
て海まといハ祝とあせらまひ

三
祝と申さんと神はちのゆのみゆも
かゝる向し夕花の 雲とちりん
神と 傳と 縁と 縁と 縁と
人の八と女と人乃ううのこ若れ神と
いさうゆふ花とゆきうと神とすし
東の神は神はゆきせて神も直哀と
さんのみ神は神とさうしゆと神と

あまのうらとさうさうと申と神と奉
じ女の神とさうさうと申と神と奉
あまのうらとさうさうと申と神と奉
八相成道と利物と神と
神乃代七代 日 他ひききり
舞あれ道とて質とてと書とて

善くも故扇とのも然ひひかすの如く
と君とに付てしては終昔まににやま
ひいづよくは扇と然ひまよふ乃母
あまのまをさるひにわまりのひあくは振
舞にのらりどひあひまをさるひのり
斑女おこしの風情らたてしごとくも
ひ金の色ふらまの海一とあてらる方へも

物入 ^一 _下 木をむやまのりむまにたせと
ひみかたらうたかちぢいにはひら産
乃母をそとせられ ^{トウ} _ウ の海よみはあ
あそそむも ^上 _下 花の星とまをん
近江諸あまとう人 ^上 _下 割きしよめ
神の魂を海に流ぬ身 ^上 _下 吹つさく
弓 ^上 _下 海から ^上 _下 舟を ^上 _下 舟の ^上 _下 帆を ^上 _下 舟を ^上 _下 帆を

かゝるは班女を世に者としておかし

なすは世にれし^{上七}事細なるは

世に事あるは班女のみなるは^{上七}ハ

世に事あるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

世のあらはるは^{上七}ハ

九世法持風のたふあふえをゆり
らるるのわがた書^上に書れ雅よのあと思
ひうらゝのわがたわくれせとが力とらるるに
あはるるのと神や仏もあはれとてあふと
るるに^下は^上支是柄^下我根^上由^下所^上海^下本^上根
神や三輪乃明神ハまぬ男女のかさひに
守^上らんと^下誓^上あり^下ま^上ん^下し^上神^下と^上り^下我^上也^下

いざとらあふ^上に^下た^上あ^下る^上る^下に^上信^下と^上再^下我^上也^下
急^上と^下る^上神^下を^上ら^下ま^上る^下に^上家^下あ^上ら^下り^上
と^上ら^下る^上に^下あ^上ら^下り^上わ^下ら^上ぬ^下の^上人^下心^上や^下
あ^上ら^下る^上に^下あ^上ら^下り^上み^下ら^上り^下川^上よ^下急^上せ^下と^上流^下
ら^上ひ^下ま^上ん^下守^上を^下あ^上ら^下れ^上ら^下ん^上心^下海^上と^下す^上な^下
き^上あ^下ら^上の^下え^上の^下ど^上海^下と^上神^下海^上の^下神^上と^下え^上ら^下り^上
たま^上と^下ぬ^上ハ^下と^上り^下あ^上ら^下あ^上は^下め^上く^下あ^上ま^下ん

形見の扇をいふまじく打をさすは神乃

まのたしをさすもさひそせり。現女も移り

のらりあは秋の扇の通楚を乃其を

あは秋乃琴は変多なる扇と秋乃

白象とのまじりなはあひのの扇ま

浦や独寝乃さひと揺と移りの扇

も那も心 月をさすは心あまの扇

あびてえれとあまの花巾よおらりあは

香をいあひあてまを打む。上タは扇朝

乃雲のりまらさひ乃まあぬ。さひのさ

秋守は鐘の音。きいあは山よのさ

あひあをさすはれとあひあすせあそ

移りもる月よま。志を揺は移り

しんみひの移りあめりや。葉は

因に抱あしめり麻のこをわすれぬ
そらも同元の終孝の終がたも同
いそれ流のこをさるのまをせり
あたまもひびくせんはさうひを
宮の水浪もあれり今世を
しらさくひびくせんはさうひを
いそれ流のこをさるのまをせり

あしめり麻のこをわすれぬ
そらも同元の終孝の終がたも同
いそれ流のこをさるのまをせり
あたまもひびくせんはさうひを
宮の水浪もあれり今世を
しらさくひびくせんはさうひを
いそれ流のこをさるのまをせり

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Urdu, consisting of approximately seven lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely Persian or Urdu, consisting of approximately seven lines of text. The bottom portion of this section includes red ink markings and some boxed-in characters.

戸の...の...の...の...の...の...

侍殿物清と...の...の...の...の...

成靈後と...の...の...の...の...

花乃わらたよ...の...の...の...の...

鳥の老くと此れ時薄暮くのけり書れぬ
れ月の都に我くありかあはるの雲と
立出く我をひうにありむけの若狭の
月乃西の海塩のむらに浦らけく
上 松の葉にありけかほくあゆらけく
くまそとえそあはるり火乃あそりと
色ハ類波津に咲ゆるの花を著る今

ハ羽は都領乃どけりしあはは梅よほさ
まはる雲衣林よあはるのく 遠に
人家とるく花あまは使いあまは本は
にま家あ花とあまは ぬそやうとあま
あはるのくあはるれくをけくまはた
若そくハ書乃あはるのそらあはる
あはるのそらあはるそらあはるのそらあはる

...の...
...の...

人_ニ家_トと_スく_ニ花_ハお_まは_レ便_ハい_ハあ_まは_レ本_法

に_ハま_ま花_とあ_まは_レ ハあ_まや_うと_と

あ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レ

あ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レ

あ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レあ_まは_レ

金ゆゑの如く〜とら花よ清香月よひびお輝

万影のまよものも實と知り此花と折せ下

事らふ海〜^上実と是ら山に花おて

ぬ笑おれハ〜と花と意衣のひひや

きけと陰くらひの波うらやせハ我ら下

うらやま〜花もあさ〜^上いひ波下

実秋とあ〜ひらま〜喜れ為手折らぬ

人のあ〜あ〜心毛らも情有や所の色

れあ〜その柳橋と〜とせと折れ雲の

錦あ〜あ〜く〜^上いら旅人山身ら〜川方よ

里来り信ふと〜^上是ハ津國芦花のさ〜とん

公光と戸者あ〜のり我知り〜比よのりも侍

勢お作とあ〜がれ処よも秋のま〜た〜とる

花乃陰よのりも紅の袴た〜ま〜あ〜れあ〜

